春をさがしに。
まきの手帖
The Kochi Prefectural Makino Botanical Garden
Makino's note No.09
FREE PAPER

植物園に春が来た。

文 藤川和美

草花が教えてくれる春の訪れ。

新春のバイカオウレンの可憐な花を眺め、冷えた朝にはシモバシラをパチリと写真に収める。華やかなラン展が終わると、いよいよ植物園に本格的な春が来る。

暖かい日が続けば、あっという間に草木が芽吹き、スターたちが来園者を待ちわびる。トサミズキ、イカリソウ、サクラ類、ツツジ類、ナンジャモンジャ（ヒトツバタゴ）、トビカズラと、昨年からはケシも仲間入り。

つぎつぎに豊かな表情を見せてくれる植物園では、一番身近にある植物ほど見えなくなってしまいがちだ。春の園地を彩る脇役、それぞれに決して、植物名を記したラベルはない。スミレ、タンポポ、ハルジョオン、オオイヌノフグリ、キランソウ、セントウソウにヘビイチゴなどなど。野の花や雑草とも呼ばれるこれらの草花は、職員たちの工夫された管理のもと、踏まれてもたくましく、そこここに姿を見せてくれるのだ。そうやってさりげなく春を告げ、スターたちのかたわらで、自然に調和した魅力的な園地を醸しだす。

身近な植物ほど当たりまえで、つい感謝の気持ちを忘れてしまう。土台になっている草花たちにも感謝を忘れずに、ありがとう。

春の足音。

寒さやわらぎ、陽射しに暖かさを感じるころ
植物園のあちこちで花が開き始めます。
そこには、職員が植えた植物ばかりではなく、
すっかり園内の環境に適して
生育している植物たちがいます。
五台山の自然を活かし、そんな植物たちが
暮らせるよう工夫された植物園。
足もとに息づく、素朴で小さな春の使者を
見つけにきてみませんか?

文 前田綾子　写真 鴻上泰

ムラサキケマン

［ケシ科］

花は少し暖かくなったころから夏の初めまで見られます。果実は熟すとパチンとはじけ、タネは遠くに飛ばされます。タネには付属体というアリの好物がついていて、飛ばされたタネはアリによって、さらに広い範囲に運ばれます。今までなかったところにムラサキケマンが突然現れたら、それはアリの仕業かも。

キュウリグサ

［ムラサキ科］

春遅くから5月ごろまで見られる越年草です。名の由来は葉や茎をもむとキュウリに似た匂いがするところから。花序は最初固い渦巻き状をしていますが、花がもとの方から順に咲いていくと、渦巻きが次第にほどかれて長く伸びていきます。空色の愛らしい花の大きさは、わずか2、3ミリ。

ホトケノザ

［シソ科］

まだ寒いころ、霜の降りた枯れ草の中で花を咲かせ、夏の初めごろまで見られる越年草です。茎は四角。葉は茎をぐるっと巻いているように見えますが、2枚が向かい合っています。筒状の花の奥には蜜があり、花の入口で前に飛び出している唇弁は、虫の止まり場になっています。開いていない小さい花は、虫が来なくてもタネができる閉鎖花。春の七草の「ホトケノザ」はコオニタビラコという別の植物です。

カラスノエンドウ

［マメ科］

春から夏の初めに花を咲かせる越年草。1枚の葉は対になった小葉と先端が分枝する“つる”からできています。小葉の先端が矢筈（やはず）のように凹んでいるため、ヤハズエンドウとも呼ばれます。葉の付け根にある蜜腺がアリを引きよせることで、他の虫に食べられるのを防いでいると考えられています。よく似ているスズメノエンドウやカスマグサには蜜腺がなく、先端が凹みません。

シハイスミレ

牧野博士が命名したスミレ。1891年に『日本植物志図篇』に植物図と記載文を添えて発表しました。和名の紫背（しはい）スミレは、葉の裏面が紫色であることに因みます。やや乾燥した明るい林縁や林内に見られます。

シロバナタンポポ

高知県ではふつうに見られる白花の在来タンポポ。最近の遺伝子（DNA）解析の研究から、日本中のシロバナタンポポは1クローン（遺伝子はすべて同じ）といわれていますが、葉の切れ込み、頭花の大きさや総苞の形はさまざまです。

スミレ

スミレという名はスミレ属の総称でもあるため、本種をその種小名からマンジュリカと呼ぶことがあります。よく陽のあたる場所に生え、へら形の葉と翼のある葉柄が特徴です。牧野植物園では、土佐の植物生態園や芝生広場などで見ることができます。

Viola まきので見られる すみれ・Taraxacum たんぽぽ

Experience the Wonders of Plants

暖かくなるにつれ、草木が芽吹く牧野植物園で
主役ではないけれどたくましく、
“すみれ”と“たんぽぽ”があちらこちらに咲いています。
道草をして、どこにでもある植物を観察してみる、
そんな贅沢な時間をお過ごしください。

文 藤川和美　スミレ写真提供 細川公子　絵 岡林里佳

ヒメスミレとアリアケスミレ

ヒメスミレは、1892年に牧野博士が“小さい＝姫”スミレとして名付けました。アリアケスミレは、はっきりした紫色の条が白～淡紫色の花弁に入り、やや湿り気のある場所に生えます。ぜひ、園内の南園 温室下の池の周辺で探してみてください。

タチツボスミレ

庭、路傍、人里から山地まで幅広く生育し、園内でも小群落が見られます。タチツボの“ツボ”とは昔の言葉でいう“庭”のこと。広い意味で庭先から野辺へかけてを“ツボ”と呼んだことに由来します。

セイヨウタンポポ

黄花で総苞片が反り返るタンポポ。日本には明治の初め、札幌農学校の外国人教師ブルックスがサラダ野菜として持ち込んだのが始まりといわれています。牧野博士は1904年に札幌の道端にこのタンポポが繁殖していると聞き、“日本中に広がる”ことを予見しました。

Exhibition Information

すみれ・たんぽぽ展　Special Exhibition of Viola and Taraxacum

平成27年度企画展

2016.2/20（土）～5/29（日）

牧野富太郎記念館 展示館
企画展示室・植物画ギャラリー

本展では、調査ボランティアの皆さんと一緒に調べた、高知県に生えているスミレとタンポポを一挙に紹介！見ごろを迎える園内のスミレとタンポポとあわせて、ぜひご覧ください。関連の催しとして、タンポポに関する講演会やスミレ教室、ギャラリートークも開催します。

まきの手帖

The Kochi Prefectural Makino Botanical Garden

Makino's note No.09
FREE PAPER

編集・制作・発行／高知県立牧野植物園
印　刷／株式会社高陽堂印刷
発行日／2016年2月20日

● 高知県立牧野植物園

県立牧野植物園は、高知県出身の世界的な植物学者牧野富太郎博士の業績を顕彰するため1958年に開園。四季折々約3,000種類の草花をはじめ、南園の「50周年記念庭園」や温室、北園の薬用植物区などでさまざまな植物に出会うことができる。

● 牧野富太郎博士（1862～1957）

現在の高知県高岡郡佐川町生まれ。豊かな自然の中で幼少から植物に興味を持ち、独学で植物学の研究を続ける。22歳で上京し、植物分類学の研究に打ち込む。27歳の時、日本で初めて植物の学名を命名。また『牧野日本植物図鑑』を著すなど、94年の生涯を通して日本の植物分類学の基礎を築き、植物知識を広く一般に普及させた。

● ご利用案内

［開園時間］午前9時～午後5時
［休　園　日］年末年始（12/27～1/1）
［入　園　料］一般720円（高校生以下無料）
団体620円（20名以上）
年間入園券2,880円（1年間有効のフリーパス）
身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者と介護者1名および高知市・高知県長寿手帳所持者は無料

- JR高知駅から車で約20分
- 高知自動車道「高知IC」から五台山方面へ約20分
- 駐車場無料（普通車195台、バス8台）

高知県立 牧野植物園
The Kochi Prefectural Makino Botanical Garden

〒781-8125　高知市五台山4200-6
TEL:088-882-2601　FAX:088-882-8635
www.makino.or.jp
www.facebook.com/MakinoBotanicalGarden